



子どもたちのために何ができるか ふるさと教育

特集 教育支援コーディネーター座談会

平成18年4月から、市内の7つの中学校区に教育支援コーディネーターが配置され、1年が経過しました。今回は、「子どもたちのために何ができるか」をテーマに設け、これまでの活動を振り返って感じたこと、今後の教育のめざすべき方向性などについて、教育支援コーディネーターのみなさんに話をいただきました。



加茂中：市場 享、海潮中：錦織慎司、大東中：加藤雄二

中学校勤務で感じたこと

実際に中学校で勤務してみても感じたことをお聞かせください。

加藤 ます、様々な事情を抱える子どもが多くなってきていると感じます。それに伴って教師の負担は増加する一方だと思います。

錦織 よく今の先生は「云々」と言われますが、昔に比べて教師の役割が大きくなってきていることは事実ですね。実際、児童生徒一人ひとりに対して

きめ細かく指導されていると大切にされていると思います。正直、自分たちが中学生の頃より、教育そのものは良くなっていると思いますよ。でも子どもの学力や体力、耐性など様々な力が低下しているのが現状です。そういう中で学校はよく奮闘していると思います。

市場 確かにそうですね。しかし、実際には部活動は生徒指導上の大きな部分を担っています。

教師の負担 といえば、部活動の指導も大きいと聞かれています。

市場 確かにそうですね。しかし、実際には部活動は生徒指導上の大きな部分を担っています。

石田 「じゃあ日本も同じようにすれば、って話になるでしょうけど、すぐに制度が変わる訳ではありません。しかし、何も道德の授業でしか道徳心がつかないという訳じゃないので、給食や掃除などみんなで協力して行う作業の中でも道徳的要素は育まれますよね。そういう人間同士の交流の中でこそ育まれるものだと思います。

飛田 そう、これからの学校経営は「いかにうまく外部人材等を活用するか」ということだと思います。つまり、今

いるので、学校としても「じゃあ外部の方に」とはすくなく言えないと思いますよ。

但馬 日本の場合は「知・徳・体」の育成すべてを学校が担っています。しかし、外国の例を挙げると知育は学校、徳育は宗教や家庭、そして体育は地域のスポーツクラブなどを中心となって役割を果たすといったように、ある程度分担されていますよね。

石田 「じゃあ日本も同じようにすれば、って話になるでしょうけど、すぐに制度が変わる訳ではありません。しかし、何も道德の授業でしか道徳心がつかないという訳じゃないので、給食や掃除などみんなで協力して行う作業の中でも道徳的要素は育まれますよね。そういう人間同士の交流の中でこそ育まれるものだと思います。

但馬 そうですよ。ですから今の学校制度を維持しつつも、学校だけで対応しきれないことについては、地域の方にも協力していただくことは必要だと思います。

飛田 そう、これからの学校経営は「いかにうまく外部人材等を活用するか」ということだと思います。つまり、今

後は教師のコーディネート力というのが特に重要になってくると思います。

市場 地域の方をうまく学校に呼び入れるべきだと。

伊藤 逆に地域のほうからもうと学校に入っていた方がいいです。もし何らかの壁があるのだとすれば、私たちが教育支援コーディネーターがその壁を取っ払う役目をする必要があります。

「開かれた学校」 に対する壁が「安全管理」の問題で、これらは一見まったく両極端だと思われがちです。しかし、例えば、学校の空き教室などを地域住民が集える居場所として開放し、そこで高齢者学級や趣味の教室などを開くことによって、地域の方々の目が行き届くようになり、子どもを守ることにつながっていくのではないかと考えます。

教育支援コーディネーター座談会



【教育支援コーディネーター】写真左から 掛合中：但馬裕朗、吉田中：伊藤 慶、三刀屋中：石田 誠、木次中：飛田博志、

加藤 その中で、子どもたちと地域の方々が休み時間や放課後の時間にふれあうことは、子どもたちだけでなく双方にとって有意義な場・時間であると思います。もちろん休み時間だけでなく、特別講師として授業にも参加してもらいたいと思います。究極は学校を核にして地域のコミュニティを活性化していくことという事です。

子どもの生活リズムを向上させるために

子どもや学校を支える地域の役割は少しかつてきました。ここでは、家庭の役割はどのようなものかについてお話を伺います。

伊藤 現在、国をあげて「早期起き朝ごはん運動」に取り組んでいます。子ども

の生活リズムの向上、これに繋がるといえます。平成17年度に、市内の小中学生全員、幼稚園・保育所の保護者を対象に「生活実態調査」を行いました。これによると、全国的な調査と比較して、雲南市の子どものテレビなどメディアに接している時間が非常に多いことがわかりました。こうした結果を受け、本市では子どもの生活リズムを向上させるため様々な取り組みを行いました。

様々な取り組みをされた成果というの出発点でしょうか。

市場 平成17年度に引き続き、平成18年度も「生活実態調査」を行いました。調査結果を比較すると、平日のテレビ等の時間は短くなりましたが、休日そのものは多くまりました。つまり、学校から子どもに対する教育・啓発活動は効果が出ているということですが、家庭の中での取り組みが弱いのではないかと考えられます。

錦織 こうした中、大東の久野小学校区では、以前から「メディア」の取り組みを実践してあら、前回のデー

タより良くなっていますし、市内の他地域よりも良い結果となっております。

但馬 掛合中学校区では、生活リズムの向上が学習意欲や態度、ひいては、学力の向上にも結びつくよう、全ての学校で「生活リズムチェック」が実践されています。他地域と比較してメディアとの接触時間が大幅に減少し、家庭での学習時間や読書量が増加しました。

石田 この他にも「1日30分間は親子で一緒に読書の時間を設ける」とか「食事のときはテレビを消す」など家庭の中でルールを決めて取り組んでおられるPTAがあります。このように「親子で一緒に取り組む」など、ちょっとした工夫や、負担感の少ない取り組みからはじめてみることも効果的だと思います。

但馬 つまりやればやるだけ効果は出てくるということを実感しました。しかし、この取り組みが一過性のものに終わってしまったら意味がありません。継続的に実践していくことももちろんですが、新たな試みも始める必要があり。例えば、子どもたちが学校の家庭科の授業で習った

ことを家庭で反復するということ。家庭科の授業で教わっただけでは、裁縫、調理などの技術が身につかないと思うんですよ。将来の大人親を育てるためにも、家庭での手伝いなどによって「生きる技術」「生活力」を高めていってほしいですね。併せて、学校は授業の様子を家庭や地域に情報発信することも大切ではないかと思えます。

伊藤 また、子どもたちの体力の低下も懸念されているところですが、まずこの生活リズムを整えることが、体力づくりの第一歩になると言えます。各家庭では毎日朝ごはんをしっかりと食べさせていただきたいと思っています。いずれにしてもこの「早期起き朝ごはん運動」は今後も継続し

